

## 二条院讃岐の実人生(六)

――後半生を中心に――

伊佐迪子

### 〔抄録〕

兼実家の姫君は入内し中宮へと上った。兼実家では中宮を支える為に、父親の兼実と母親役の讃岐が中宮御方へ常に祇候して扶持する。母儀は雑用や病気の世話などには携わらない。中宮の毎日には順調に推移する事である。中宮は里心を起しては大炊亭へ退居を望むので、その間は狭小では居住者側が身を疎めての毎日なのである。従って兼実家の様相は一変した。

良經は後鳥羽天皇の文人上首に認められ、能保卿女を娶り、一条亭に居所を構え幸先のよい出立であった。兼実は所労に悩み、灸治に頼り、内裏から助けを求め、讃岐に頼り切っている。

キーワード 中宮 良經 文人 御不豫 法皇

### はじめに

兼実家に入って十七年目の二条院讃岐である。兼実家の北政所と家宣旨に就き、兼実家経営の中枢にある。本稿では建久元年と建久二年の二年間を検証する。

建久元年一月十一日、兼実家の姫君は入内し、後鳥羽天皇の中宮に上った。姫君の入内は兼実家の更なる繁栄を託した宿願であったが、皇子誕生に依る外祖父の地位を得ることは難しいことである。更に姫

君の都合に左右されて、大炊亭での生活状況は大きな様変わりを見せている。

姫君の入内後、兼実は常時参内宿候し、讃岐も中宮へ参候を繰り返して、大炊亭は留守宅化した。二年目は中宮御不豫の連続なので御不豫を中心に置いて、讃岐の日々を検証する。

(本稿において二条院讃岐を讃岐とのみ表記する)

(17) 建久元年(一一九〇) 讃岐四十九歳 兼実四十二歳

姫君十八歳 良經二十二歳

一月十一日 午上雨降、午後猶天陰、入<sub>レ</sub>夜、風靜月明也、

此日、摂政大臣長女有<sub>二</sub>入内事<sub>一</sub>、(余長女、生年十八、余冊<sub>二</sub>姫君、御帳前平敷御座、(母儀在其傍、)余奉<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>着御裳<sub>一</sub>、次中将忠季朝臣、持<sub>二</sub>御書<sub>一</sub>参進、就<sub>二</sub>簾下<sub>一</sub>進<sub>レ</sub>之、女房大貳、於<sub>二</sub>簾中<sub>一</sub>取<sub>二</sub>入之<sub>一</sub>、女房三位殿、傳<sub>二</sub>北政所<sub>一</sub>云々、傳<sub>二</sub>余<sub>一</sub>了、持参進<sub>二</sub>三位殿<sub>一</sub>、披<sub>レ</sub>之御覽了、

次輩<sub>二</sub>青糸毛車<sub>一</sub>於寢殿南階、次三位殿、并母儀三品乗<sub>レ</sub>之、此間殿上人已下、取<sub>二</sub>松明<sub>一</sub>列<sub>二</sub>居南庭<sub>一</sub>、余於<sub>二</sub>南面西門<sub>一</sub>乗<sub>レ</sub>車、到<sub>二</sub>藤壺東面北車寄<sub>一</sub>、下御引<sub>二</sub>出手輦<sub>一</sub>、即御帳前平敷御座也、

次供<sub>二</sub>御前物<sub>一</sub>、陪膳北政所女房、余候<sub>二</sub>御前<sub>一</sub>、先取<sub>二</sub>最花<sub>一</sub>、三箸食<sub>レ</sub>之、(鯛同食<sub>レ</sub>之)食了、

次女御殿参上給、女房六人在<sub>二</sub>御共<sub>一</sub>、主上着<sub>二</sub>給御冠<sub>一</sub>、御直衣、着<sub>二</sub>御指鞋<sub>一</sub>、入<sub>二</sub>夜御殿西戸御帳西<sub>一</sub>、次主上撤<sub>二</sub>御装束<sub>一</sub>、次三位殿脱<sub>二</sub>御袴御衣<sub>一</sub>、北方<sub>二</sub>押遣<sub>一</sub>臥御、(主上南、三位殿北)次取<sub>二</sub>御指鞋<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>左大将<sub>一</sub>、遣<sub>二</sub>藤壺<sub>一</sub>、候<sub>二</sub>御共<sub>一</sub>女房等、終夜候<sub>二</sub>上御壺欄<sub>一</sub>、余及大将、着<sub>二</sub>藤壺餐座<sub>一</sub>、三獻了、人々退下、余帰入、北政所相共付<sub>レ</sub>寝、御指鞋在<sub>レ</sub>傍、

藤壺坤小局、為<sub>二</sub>北政所宿所<sub>一</sub>、余直廬、凝華舎也、其邊生火置<sub>レ</sub>之、三箇日夜不<sub>レ</sub>消也、

一月十二日 人々来、儲<sub>レ</sub>餐、有<sub>二</sub>三獻<sub>一</sub>、

一月十三日 人々来、有<sub>二</sub>三獻<sub>一</sub>、打出如<sub>レ</sub>昨、

一月十六日 取<sub>二</sub>御指鞋<sub>一</sub>給<sub>二</sub>余辛櫃<sub>一</sub>、又取<sub>二</sub>御衾<sub>一</sub>給<sub>二</sub>御辛櫃<sub>一</sub>、

此日、露頭、御宣旨、後朝御書、三夜餅、侍始、女官祿等也、先女房等着<sub>二</sub>装束<sub>一</sub>、官奏、政始也、

一月十七日 御帳中、本寮御衾披<sub>レ</sub>之、納<sub>二</sub>辛櫃<sub>一</sub>、今日、北政所退出、  
\*二月一日(二月末日まで記述なし。)

一月三日、天皇御元服。大納言良經は昨年の除夜に大将を拝命。三日に拝賀。十一日、姫君の入内儀あり。北政所讃岐は兼実と共に内裏に宿候。十二日、祝饗。十三日、祝饗。十六日、「ところあらわし」「女御宣旨」など一連の行事あり。兼実は天皇の御指鞋と御衾を給わる。

十七日、北政所は兼実家相伝の御衾を辛櫃に納めて、一旦内裏を退出。大炊亭へ帰宅。

三月三日 女房節供如<sub>レ</sub>常、此夜宿<sub>二</sub>大炊亭<sub>一</sub>、

三月六日 早旦、退<sub>二</sub>出大炊御門亭<sub>一</sub>、入<sub>レ</sub>夜帰<sub>二</sub>参内裏<sub>一</sub>、

三月十二日 入<sub>レ</sub>夜、参内宿仕、今夜女御殿昇給、余扶<sub>二</sub>持之<sub>一</sub>、

三月十三日 早旦参上、奉<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>女御殿<sub>一</sub>、下<sub>二</sub>宿廬<sub>一</sub>休息、深更帰<sub>二</sub>大炊亭<sub>一</sub>、

三月十五日 入<sub>レ</sub>夜女房参内、余及女房共宿候、

三月十六日 亥刻、女御参上如<sub>レ</sub>例、余候<sub>ニ</sub>御共<sub>一</sub>、此夜、宿仕、

三月十九日 此夕、女房退出、直向<sub>ニ</sub>九条堂<sub>一</sub>、

三月廿日 早旦、余向<sub>ニ</sub>九条<sub>一</sub>、依<sub>ニ</sub>故内府月忌<sub>一</sub>也、入<sub>レ</sub>夜帰来、

三月廿三日 入<sub>レ</sub>夜参内、女御殿被<sub>レ</sub>昇、深更退出、

三月廿七日 入<sub>レ</sub>夜参内、依<sub>ニ</sub>御書所作文<sub>一</sub>也、連句有<sub>ニ</sub>三十餘韵<sub>一</sub>、

其後分散、御元服以後、初度絶句也、

三月三日、大炊亭にて女房節供。兼実も大炊亭宿、十二日、十三日、十六日、廿三日、兼実の内裏任務。夜の御殿へ登る女御殿を送り、翌朝女御殿を出迎える。女御殿に終夜侍仕するのは女御女房。十五日、讃岐参内。兼実と共に内裏宿候。十九日、夕刻、讃岐は内裏を退出。九条堂へ。堂宿。廿日、故良通月忌。兼実も月忌に参入。廿七日、御書所作文。兼実と文士達により、御前で三十餘韻の連句と絶句が行われた。

四月三日 入<sub>レ</sub>夜参内、女御殿参給、今夜宿仕、

四月八日 入<sub>レ</sub>夜、参内宿候、於<sub>ニ</sub>御前<sub>一</sub>、密々有<sub>ニ</sub>詩會<sub>一</sub>、

左大将、右衛門督已下、近習人五六許輩也、

四月廿日 此夜、女御退出、

四月廿六日 女御任子有<sub>ニ</sub>冊命立后事<sub>一</sub>、去十四日兼宣旨、同十八日、

始<sub>ニ</sub>御装束<sub>一</sub>、同廿日出御、本儀、庁始廿八日、

四月廿八日 立后第二日也、先始<sub>ニ</sub>公卿座事<sub>一</sub>、余如<sub>レ</sub>昨、出<sub>レ</sub>座、

四月卅日 氏寺参賀也、未刻、公卿来、兼房卿、良経卿、光雅卿等也、

五月三日 中宮八社奉幣也、奉幣使、稻荷左少将定家朝臣、

五月七日 臨時伊勢幣也、

\* 五月は七日までの記述のみ。

\* 六月一日〜六月卅日まで記述なし。

四月三日、夜。女御殿を扶持する兼実。八日、夜。御前に於いて近習五六輩による密々詩会あり。廿日、立后のため女御殿が大炊亭へ一時退出。廿六日、立后儀。姫君は中宮に上る。廿八日、立后第二日。卅日、兼実家の氏寺参賀。

五月三日、中宮から八社に奉幣使。稻荷は左少将定家朝臣。七日、臨時に伊勢神宮への奉幣。

七月一日 神泉御讀經、今日満<sub>ニ</sub>五箇日<sub>一</sub>、早可<sub>ニ</sub>延行<sub>一</sub>者、

前宮内卿季經来、召<sub>ニ</sub>簾前<sub>一</sub>、談<sub>ニ</sub>和歌事<sub>一</sub>、

七月廿三日 午刻、請<sub>ニ</sub>法然坊源空上人<sub>一</sub>受戒、次始<sub>ニ</sub>恒例念仏<sub>一</sub>、

七月卅日 入<sub>レ</sub>夜帰<sub>ニ</sub>大炊亭<sub>一</sub>、先向<sub>ニ</sub>大将亭<sub>一</sub>、見<sub>ニ</sub>所勞<sub>一</sub>、

太以大事<sub>ニ</sub>見<sub>一</sub>、歎思事不<sub>レ</sub>少、可<sub>レ</sub>始<sub>ニ</sub>祈等<sub>一</sub>事、致<sub>ニ</sub>其沙汰<sub>一</sub>、

\* 七月は僅か四日間の記述のみ。

七月一日、神泉御讀經は満願続行。季經来宅。簾前で和歌談義。廿

三日、念仏始。兼実は法然房から受戒。兼実は法然房の強力な支援者。卅日、念仏満願。大炊亭への帰途、兼実が良經を見舞い、急遽祈祷の手配をする。中宮へ参仕中の讃岐には良經所労の知らせがなかったらしい。

八月八日 大将祈、以隆憲法印、奉供養藥師佛、同經十二卷、

又自今日、尊勝不動、修法始之、件所労、

昨今始祈等有減、入夜帰参内裏、

八月十五日 放生會、(雨下)

八月十六日 駒索、(雨下)

八月十七日 鴨川、桂川、各以洪水、近年少比類云々、

(暴風大雨、自曉更殊太、終日不止)

八月十八日 止雨御祈、

八月廿日 毎夜有御拜、今夕又有止雨幣、

八月廿三日 終日加灸治、

八月廿四日 今日又終日加灸、

八月廿八日 止雨十社奉幣也、

八月廿九日 於十社有止雨御説經、(仁王經)

八月八日、祈祷により良經の所労は少し回復。兼実は殆ど内裏宿候。十五日、月末降り続く雨。奉幣、御讀經など効果がない。十七日、暴風雨で京の河川は大洪水。十八日、止雨の祈祷。廿日、奉幣。廿三日、兼実は所労回復の灸治。廿四日、終日灸治。兼実の介護をする讃岐。

廿八日、十社へ止雨の奉幣。廿九日、十社にて止雨の御讀經。朝廷の止雨対処法は祈祷。降り続く雨。雨。

九月十四日 去夜、於大将九条亭、密々講百首、

花月各五十首、法印密々被行向云々、

九月廿日 女房為逢故内府月忌、向九條今夜堂宿、

九月廿二日 九條懺法結願也、申刻、女房帰来、大将同来、

入夜、俊成入道、季經卿已下、歌人五六人來大

将方、花月百首、各撰定十首合之、俊成入道

決雌雄云々、

余并法印、於簾中、竊聞之、興味尤深、

九月廿三日 女房参内裏、召入車侍等在共、

九月廿四日 法印被來、親性同来、佛法興隆之事談義、

入夜俄有和歌、及子刻、大将帰九條、

九月卅日 御方違行幸也、此次申中宮大夫拜賀、如例出仕也、

明曉還御、余又為方違向雲林院、

九月十四日、九条亭で良經は花月各五十首と百首を講じた。慈圓が密々参入。廿日、讃岐は九条堂へ。故良通月忌参入。御懺法に参入。堂宿。廿二日、懺法結願。申刻。讃岐と良經が大炊亭へ帰宅。夜。良經方にて俊成と歌人五六人が花月百首から各人十首を選定。俊成判定。兼実と慈圓は簾中にて密かに楽しむ。接待役讃岐も簾中後方に参入。廿三日、参内。讃岐は中宮御方へ。

廿四日、慈圓と親性、兼実と良經の四人。仏法興隆談義。俄に和歌会へと移り深夜に至る。讃岐は中宮へ参仕中。卅日、良經の中宮大夫拝賀。讃岐は大炊亭へ退出。兼実は方違で雲林院へ。

十月一日 中宮御方御更衣、而依灸治盛爛、不能步行、

十月九日 左大將着陣也、大將目今日在此亭、

十月十五日 及晩向宇治、大將同車、法印被来、

十月十七日 太上法皇、依東大寺上棟事、御下向南都、

於宇治平等院、有昼御儲事、已刻臨幸、

十月十九日 午刻、上棟、法皇已下付綱、次有拜、

十月廿日 申刻、院著宇治給、供御膳、還御、此夜帰九條、

十月廿一日 今日祇候内裏、亥刻、退出、

十月廿二日 入夜、法印被来、主上、始有御笛事、

十月廿六日 京官除目也、余辰刻参内、

十月一日、兼実は灸治盛爛。外出不可能。讃岐が世話をする。九日、左大將良經着陣。大炊亭に同居。十五日、来宅の法印と、女房同伴の兼実と、良經は宇治へ。十七日、法皇は南都御下向。宇治平等院で昼御膳を供す。十九日、午刻。東大寺で棟上げ。廿日、宇治にて昼の御膳を供す。法皇還御。夜に兼実は女房同伴で九条へ。参内。廿一日、兼実は内裏に祇候。退出。廿二日、主上は笛の修習。廿六日、京官除目。摂政兼実は廉中に坐す。

十一月四日 午刻参院、余又奏頼朝卿可被授官之由、今夜、

余宿内裏、丹三品腹姫宮、可有院號之由、

右大臣云、彼本意、只在院號云々

十一月七日 申刻、源二位頼朝卿入洛、着六波羅新造亭云々、

院已下洛中諸人見物云々、

十一月八日 小童向左中辨親經許、始為後見也、女房又参入、

十一月九日 入夜参内、今夜、頼朝卿初参、先参院、

其後参内、於昼御座有召、與頼朝卿謁談、

頼朝被任大納言、雖辞推而任之云々、

十一月十一日 依梅宮祭、新大納言頼朝卿参詣八幡云々、

十一月十四日 大原野奉幣如例、中宮御方、同被発遣之

十一月廿一日 頼朝卿申云、近国地頭不当之輩可停止云々、

十一月廿二日 吉田奉幣也、頼朝可被任大將辞申云々、

十一月廿四日 此夜有除目、頼朝卿任右大將、

十一月廿八日 早旦、向九條堂、自今夜依始饑法也、

奉為故女院、以御忌日、宛結願也、今夜宿堂、

十一月廿九日 今日、法印被来、

十一月卅日 参法成寺御八講、大將相伴、事訖帰家、参内宿仕、

十一月四日、兼実は頼朝任官について奏聞。法皇愛妾丹後三位局腹の姫宮に院号授与。右大臣は云う。欲しいのは院号のみ。七日、頼朝入洛。六波羅新造亭へ。法皇以下多数の見物人。八日、兼実息小童。後見人の左中辨親經の許へ。北政所は確認の見送り。九日、夜。頼朝

は参院、次いで参内。主上のお召し。辞退するのを強引に大納言に任官。十一日、頼朝は八幡へ参詣。十四日、大原野奉幣と発遣。例の如く。廿一日、頼朝は近国の不当な地頭の肅清を申す。

廿二日、吉田奉幣と発遣。兼実と讃岐は北隣から奉幣と発遣。頼朝は大将任官を辞退。廿四日、除目あり。頼朝を右大将に任じる。廿八日、早旦。兼実は九条堂へ。懺法を開始。故女院の御忌日に結願。廿九日、慈圓来宅。卅日、兼実は夜に参内。宿仕。

十二月三日 天台堅義也、今日右大将頼朝、着直衣出仕云々、

只参院、不参内、日昼出仕、今日、女房退出、

十二月四日 参御堂、天台堅義結願也、此日帰大炊亭、

今夕女房向九條堂、依明日結願也、

十二月五日 九條堂懺法結願也、又故女院御忌日也、入夜女

房帰来、

十二月八日 (明日は御神楽。讃岐は参内。中宮御方へ。)

十二月九日 内侍所御神楽也、入夜相伴大将参内、宮密々

昇給、竊所令聽聞給上も、余相交女房、

密々臨其所、

十二月十七日 余小童(六歳)於八條院、有着袴事、仍余参入、

大将相伴、密儀也、

十二月廿六日 二宮於仙洞、有御書始事、左大将入文人、

為上首云々、(見建久別記)

十二月廿八日 参院、参御前、少時退下、参八条院、

又向九条堂、次参内、此夜、帰家、

十二月三日、天台堅義。右大将頼朝は日昼出仕。参院。内裏へは不参。讃岐内裏退出。四日、天台堅義結願。兼実は大炊亭へ。夕方。讃岐は明日の懺法結願に依り九条堂へ。五日、懺法結願。故女院御忌日法要。夜。讃岐は大炊亭へ。八日、讃岐参内。宿候。九日、内侍所御神楽。兼実は良經を伴い参内。中宮は竊かに聴聞。兼実と讃岐、女房達も見物。十七日、八条院小童の着袴。

廿六日、仙洞御所で二宮の御書始。良經は文人に入り上首となる。

廿八日、兼実は年末の挨拶回り。夜。大炊亭へ帰宅。

(18) 建久二年(一一九一) 讃岐五十歳 兼実四十三歳

中宮十九歳 良經二十三歳

中宮は境遇の変化に馴染めず、それは「中宮御不豫」として現れる。兼実家は大炊亭へ退居させ回復に努める。建久元年の十五日宿「忌付」も同じ現象で、延々と大炊亭に退居が続いている。建久二年は兼実の所労も酷く、讃岐に助けを求める兼実である。

頼朝の上洛に依り良經の身辺が動き、良經は居所を定め、妻を娶り、安泰な人生を歩み始めた。詩歌の才能を認められ、主上の最側近として活動開始の機会を得たのである。

建久二年は兼実の長女と次男を立てて検証していく事にしたい。二人の背後で兼実と共に、誠実に自分の道を歩む讃岐の姿がある。



〔1〕 左大将良經。

三月十六日 大将自<sub>二</sub>内裏<sub>一</sub>示送云、詩歌會明日之由、親宗令<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>之、件卿此事発起衆也、

三月十七日 於<sub>二</sub>禁中<sub>一</sub>公卿侍臣不<sub>レ</sub>期而會、(其實親宗卿被<sub>二</sub>左大将命<sub>一</sub>云々)欲<sub>レ</sub>構<sub>二</sub>詩歌<sub>一</sub>、而依<sub>二</sub>能保卿鬱憤<sub>一</sub>、忽然而停止<sub>二</sub>云々<sub>一</sub>、入<sub>レ</sub>夜大将所<sub>二</sub>相語<sub>一</sub>也、

\*三月廿三日 中宮退<sub>二</sub>出<sub>一</sub>大炊御門亭、宿十五日、子刻行啓、宗頼奉行也、

\*五月二日 中宮御祈、始<sub>二</sub>修業師法<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>棟廊東庇<sub>一</sub>、為<sub>二</sub>塗壇之所<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>此大将居所<sub>一</sub>、(渡<sub>二</sub>九条<sub>一</sub>)為<sub>二</sub>法印宿所<sub>一</sub>、已刻許参内、以<sub>二</sub>使者<sub>一</sub>大将迎<sub>レ</sub>婦之儀、猶不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然、

又無<sub>二</sub>其家<sub>一</sub>、力不<sub>レ</sub>及之由、示<sub>二</sub>遣能保卿之許<sub>一</sub>了、返報云、去夜自<sub>二</sub>関東<sub>一</sub>、此間事、偏可<sub>レ</sub>隨<sub>二</sub>殿下御定<sub>一</sub>之由、申送候、仍於<sub>二</sub>今日<sub>一</sub>、

可<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>迎<sub>二</sub>大将<sub>一</sub>也、進<sub>レ</sub>娘之儀不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>候云々、

六月四日 今夜、為<sub>二</sub>十五日方違<sub>一</sub>、女房向<sub>二</sub>九條<sub>一</sub>、余依<sub>二</sub>神事<sub>一</sub>不<sub>二</sub>向居<sub>一</sub>、同居之故也、大将可<sub>レ</sub>渡之間事、依<sub>二</sub>申請<sub>一</sub>、任<sub>二</sub>先例<sub>一</sub>、遣<sub>二</sub>能保之許<sub>一</sub>了、

六月廿五日 左大将渡<sub>二</sub>別當能保卿<sub>一</sub>、一條室町亭、晚頭遣<sub>二</sub>消息於彼家<sub>一</sub>、

六月廿八日 終日平<sub>二</sub>臥宿廬<sub>一</sub>、前後不覺、俛明旦可<sub>レ</sub>退出之由仰了、一条、今日、女房改<sub>二</sub>装束<sub>一</sub>、又撤<sub>二</sub>私筵<sub>一</sub>已下<sub>二</sub>云々<sub>一</sub>、

七月八日 左大将渡<sub>二</sub>新所<sub>一</sub>之後行始也、申刻來<sub>二</sub>此亭<sub>一</sub>、着<sub>二</sub>酒饌<sub>一</sub>、

女房陪膳、其後参内、及<sub>レ</sub>晚退出、

七月廿五日 大将亭始饗<sub>二</sub>応賓客<sub>一</sub>云々、三獻有<sub>二</sub>朗詠<sub>一</sub>、其後大将女房行始、來<sub>二</sub>此亭<sub>一</sub>、前驅十人、少時、女房帰、余與<sub>二</sub>贈物<sub>一</sub>、手本付<sub>二</sub>銀枝<sub>一</sub>、

八月一日 大将初度作文事、仰<sub>二</sub>長房<sub>一</sub>令<sub>二</sub>奉行<sub>一</sub>云々、旬祓如<sub>レ</sub>例、

建久二年三月十六日、内裏から良經の書面。「親宗は発起衆なので詩歌会を行うと布令させた。」十七日、「禁中で公卿侍臣が期せずして会ったので、詩歌会を催したい。」しかし親宗は左大将に命じられたと云った。これに依り能保のご機嫌を損ね、詩歌会は立ち消え。夜に帰宅した良經が語った。廿三日、中宮は宿十五日「忌付」で大炊亭へ退居。奉行宗頼朝臣。

五月二日、中宮の御祈祷。薬師法。良經は九条亭へ移居。法印の宿舎にする。六月二日、兼実参内。能保へ申し送りをする。「使者を以て良經が婦を迎えるというのは、第一その家も無<sub>レ</sub>力及ばず。この儀は到底受けられない」。能保の応答。「昨夜関東から、殿下のお考えに随います。左大将良經を迎え奉るべきであり、女を進る儀は取り下げます。」との返事があつたと云う。

六月四日、良經が嫁を迎えるには、居所にする家を借りなければならぬ。能保は理解した。能保には小直廬がある。借受け申請書を兼実が書いている。六月廿五日、左大将良經は別當能保卿直廬へ渡り居を構えた。一条室町亭と称する。兼実から能保卿へ消息を遣わす。六月廿八日、筵已下總てを取り払い、一条亭の装束を讃岐が改めた。

七月八日、良經は居所の一条亭へ渡る。行始め。大炊亭に来て女房陪膳の酒饌に着く。その後参内。夜に退出。七月廿五日、一条亭で始めての賓客饗応。三献、朗詠あり。この後に良經女房行始め。大炊亭へ来宅。前駆十人。良經女房は直帰宅。兼実 hands 銀枝につけた贈物を与える。

能保には適齡の女があつた。兼実が一条亭借り受けのとき、良經の嫁にと話が成立し、良經は居所と妻を手にしたのである。頼朝が娘をと画策するので、能保の心は不安であつただろう。

八月一日、主上の初度の御書所作文。前年末に二宮の文人に入り上首となつた良經が、主上の片腕として活躍する場を得たのである。

〔2〕中宮任子。―宿十五日「忌付」―

三月廿三日 中宮退<sub>ニ</sub>出大炊御門亭、宿十五日忌付、子刻行啓、

宗頼奉行也、

三月廿九日 中宮、密々令<sub>レ</sub>灸給、

四月五日 或人云、頼朝卿女子來十月可<sub>ニ</sub>入内云々、如<sub>レ</sub>此之大事、已剋聞<sub>ニ</sub>此事、

四月六日 殿上人等参<sub>ニ</sub>宮御方<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>蹴鞠會、雨脚頻降、俱分散了、

四月七日 松尾平野等祭也、中宮被<sub>レ</sub>立<sub>ニ</sub>平野使、余参<sub>ニ</sub>御前、

少時退出、

四月八日 梅宮祭也、未刻於<sub>ニ</sub>九条亭<sub>ニ</sub>發遣神馬十列、

而瘧病忽發、晚頭帰<sub>ニ</sub>大炊亭<sub>ニ</sub>、與<sub>ニ</sub>女房同車、

四月十三日 於<sub>ニ</sub>中宮<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>童舞事、

四月十九日 日吉祭也、加茂祭使今日進發、

四月廿日 賀茂祭也、宮女房并家女房等、向<sub>ニ</sub>棧敷<sub>ニ</sub>見物、大将

相<sub>ニ</sub>伴之<sub>ニ</sub>、二位最密々見<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>、宮御方出車三両、此

方女房出車二両、

四月廿三日 吉田祭也、中宮被<sub>レ</sub>立<sub>ニ</sub>使、御禊儀如<sub>レ</sub>例、申始發遣了、

五月二日 中宮御祈、始<sub>ニ</sub>修藥師法<sub>ニ</sub>、以<sub>ニ</sub>二棟廊東庇<sub>ニ</sub>、為<sub>ニ</sub>塗壇

之所、以<sub>ニ</sub>此大将居所<sub>ニ</sub>、(渡<sub>ニ</sub>九条<sub>ニ</sub>)為<sub>ニ</sub>法印宿所<sub>ニ</sub>、

五月廿六日 最勝講初日也、未刻、相<sub>ニ</sub>伴大将<sub>ニ</sub>参内、論義未<sub>レ</sub>終

之間、大将并宗頼朝臣等、令<sub>ニ</sub>参<sub>ニ</sub>上中宮<sub>ニ</sub>、為<sub>ニ</sub>催<sub>ニ</sub>

促行啓事<sub>ニ</sub>也、論義了、余参<sub>ニ</sub>中宮<sub>ニ</sub>、其後、女房等

乘<sub>ニ</sub>出車<sub>ニ</sub>、次寄<sub>ニ</sub>御輿<sub>ニ</sub>、先是有<sub>ニ</sub>御反閉<sub>ニ</sub>、中宮、去

三月御退出、依<sub>ニ</sub>方忌<sub>ニ</sub>也、

其後渡<sub>ニ</sub>御邪氣<sub>ニ</sub>、今曉追<sub>ニ</sub>御物氣<sub>ニ</sub>、今夕御入内也

三月廿三日、宿十五日「忌付」で中宮は大炊亭へ退居。廿九日、中

宮は灸治。四月五日、或人が云う。「頼朝卿女は来る十月に入内する。」大事を聞き兼実は中宮位を脅かされると不安になる。六日、殿

上人等が中宮御方にて蹴鞠会を催す。降雨中止。この日宿十五日満期。

七日、松尾平野祭。中宮の平野使発遣。八日、九条亭にて神馬十列発

遣。十三日、中宮にて童舞あり。十九日、日吉祭。廿日、賀茂祭。宮

女房と家女房棧敷へ向い見物。良經が女房達を伴う。母儀密々見物。

廿三日、吉田祭。御禊儀は恒の如く。申始。中宮使発遣。

五月二日、中宮御祈禱。藥師法。良經居所の二棟廊東庇に塗壇を置



き、慈圓法印の宿所とする。良經は九条亭へ移る。廿六日、最勝講初日。未刻。兼実は良經を伴い参内。論議中。終了以前に良經と宗頼を中宮御方へ遣る。行啓を催促させる。兼実は論議終了後中宮へ参る。その後女房等は出車へ。次いで御輿を寄せる。御反閉あり。中宮は去る三月方忌にて御退居。今夕御入内。

〔2〕中宮任子。―御不豫 その一―

八月廿四日 早旦、中宮女房告送云、宮自去夜聊不例御坐、依日次宜、即今日始祈等、鬼氣、土公等祭、呪詛祭、月曜祭、仁王講、

八月廿五日 中宮、猶六借御坐者、召陰陽師七人、行招魂御祭也、告送云、今夜、御汗快出、御温氣散了云々、三位殿参宮了、

八月廿六日 中宮御不例、猶六借御坐云々、始種々御祈、  
八月廿七日 有靈所御祓、(七所也) 陰陽師七人、修七座泰山府君祭、聊有御減、温氣大略散了云々、智詮出レ力

奉護身云々、佛神之加護歟、此夜、女房先以参内、讀誦之行、今日、

満七ヶ日之故也、余明日可レ給也、

八月廿八日 念仏結願也、其後参内、奉見之處、大略如平減、宿候、  
八月廿九日 於春日御社、転如説大般若經、春日立神馬奉幣使、入夜帰参内裏、中宮欲被退出、依減氣留了、来月心閑可レ有退出也、

八月廿四日、早旦。中宮女房から告送。「中宮は聊か御不例」。日次良好。今日から祈禱を開始。鬼氣土公等祭。呪詛祭。月曜祭。仁王講など。廿五日、中宮は猶御不例。陰陽師七人で招魂御祭を行う。女房告送。「今夜お汗が快出し御温氣も散じた」。女房三位殿が中宮を訪う。廿六日、中宮不豫は猶難しい。種々御祈禱を修する。廿七日、靈所で御祓。温氣は大略下る。智詮全力で護身を修する。神仏の加護あり。今夜讀岐が先ず参内。九条堂の讀誦行が今日七カ日満願。兼実は明日参入の予定。廿八日、念佛結願。兼実参内。中宮は大略平常状態。今夜は宿候。

廿九日、春日社にて如説大般若經を転讀。春日へ神馬奉幣使を立てる。夜。兼実は内裏に帰参。中宮は大炊亭へ退居希望。回復したので来月心閑かに退出をと止める兼実。

〔2〕中宮任子。―御不豫 その二―

九月廿三日 中宮依不例、退出里亭、事火急之故也、今日御心地聊宣、

仍行啓之間無為、今日、事率璽之間、出車三両、大夫已下、公卿六七人許供奉、亥刻、出内裏、即渡御大炊亭、即始修不動法、(智詮權法橋) 渡邪氣、

九月廿四日 於日吉、始修大般若御讀經、今日御有様、只同前也、  
九月廿六日 始災惑星供、珍賀修之、於住吉社、始大般若転説、  
九月廿七日 中宮御祈、始修普賢延命大法、大和尚位慈圓也、

子刻許始行、初夜時、中宮於中妻戸簾中<sub>ニ</sub>也、  
令<sub>レ</sub>逢<sub>レ</sub>時給、

母儀二品、并余等候御傍、奉扶持、此日、  
奉<sub>レ</sub>加<sub>ニ</sub>少灸<sub>一</sub>、余奉指檢、大椎、身柱、巨穴、  
三ヶ所也、

九月廿九日 於<sub>ニ</sub>梅宮<sub>一</sub>、<sub>ニ</sub>転<sub>ニ</sub>読<sub>ニ</sub>百部仁王講<sub>一</sub>、於<sub>ニ</sub>法成寺<sub>一</sub>、修<sub>ニ</sub>最勝講<sub>一</sub>、

請<sub>ニ</sub>法然房上人<sub>一</sub>、中宮有御受戒事、地體御温氣、  
聊<sub>薄</sub>令<sub>レ</sub>成給也、是灸驗歟、在<sub>ニ</sub>御大炊亭<sub>一</sub>、

十月四日 加茂御神樂參行、以<sub>ニ</sub>覺成僧正<sub>一</sub>始<sub>ニ</sub>修<sub>ニ</sub>不空羂索供<sub>一</sub>、

如法鬼氣祭、

十月六日 於<sub>ニ</sub>多武峯<sub>一</sub>、供<sub>ニ</sub>三經<sub>一</sub>、又有<sub>ニ</sub>受戒事<sub>一</sub>、

十月七日 奈良大僧正、始<sub>ニ</sub>不空羂索読經<sub>一</sub>、又被<sub>レ</sub>講讀心經廣釈、

奉<sub>レ</sub>供<sub>ニ</sub>養白檀一尺六寸不空羂索像一體<sub>一</sub>、今夜始<sub>ニ</sub>

水曜供、

十月九日 始<sub>ニ</sub>法華經御讀經<sub>一</sub>、

十月十一日 今日俄思立、供<sub>ニ</sub>養金泥心經一卷<sub>一</sub>、臨時春日奉幣使

基清、

十月十二日 献<sub>ニ</sub>神馬一疋<sub>一</sub>、

十月十四日 千度祓也、陰陽師十人、殿上人七八人、二時許結願了、

十月十五日 於<sub>ニ</sub>大原野<sub>一</sub>、一日読<sub>ニ</sub>大般若經<sub>一</sub>、不空羂索御讀經結願也、

又仰<sub>ニ</sub>智詮<sub>一</sub>、終日加持、然之間、今日不<sub>ニ</sub>發給<sub>一</sub>、

去十一日夜、或人見<sub>ニ</sub>不可説夢<sub>一</sub>、大僧正供養之尊像、

放<sub>レ</sub>光照<sub>ニ</sub>中宮御身<sub>一</sub>、守護給之由所<sub>レ</sub>見也、今旦、

法印、

入<sub>ニ</sub>病者臥内<sub>一</sub>、護身之間、老嫗嫗一人、竊出<sub>ニ</sub>御寢所<sub>一</sub>、  
逐電了之由見<sub>レ</sub>之、果以御驗、實不可思議也、

十月十六日 於<sub>ニ</sub>此亭南庭<sub>一</sub>、以<sub>ニ</sub>光晴<sub>一</sub>修<sub>ニ</sub>如法泰山府君祭<sub>一</sub>、

余着<sub>ニ</sub>衣冠<sub>一</sub>、出<sub>ニ</sub>祭庭<sub>一</sub>、拜<sub>レ</sub>之、今日、自<sub>レ</sub>宮、  
被<sub>レ</sub>発遣諸社奉幣、在<sub>ニ</sub>御大炊亭<sub>一</sub>、

\*十月十七日以後の記述無し。

九月廿三日、中宮不例により火急に大炊亭へ退居。今日御心地少し

宜し。行啓は無事。急な事態で出車三両。公卿六七人供奉。亥刻に内

裏を出立。大炊亭にて即不動法を修し、邪氣を渡す。廿四日、日吉で

は大般若御讀經を修する。今日の御有様は同前。廿六日、災惑星供を

珍賀が修す。住吉社では大般若転讀を開始。廿七日、中宮の御祈り。

普賢延命大法を大和尚位慈圓により始める。始行子刻頃。中宮は簾中

にて法要を聴聞。母儀、兼実、良經、讀岐等が子供に祇候し扶持。中

宮には兼実の指檢で、大椎、身柱、巨穴の三ヶ所に灸を加える。

廿九日、梅宮では百部仁王講を転讀。法成寺では最勝講を修する。

中宮は法然上人に受戒。體熱は聊か下つたらしい。兼実は云う。これ

は灸治の効果であろう。中宮は大炊亭に退居中。

十月四日、賀茂御神樂。覺成僧正により不空羂索供、如法鬼氣祭を

修する。六日、多武峯にて三經を供養。又、中宮は受戒あり。七日、

奈良大僧正は不空羂索読經を始め、讀心經廣釈を講ずる。九日、法華

經御讀經を始める。十一日、兼実は金泥經一卷を供養。臨時の春日奉

幣使は、基清。十二日、神馬一疋を献納。十四日、千度祓。陰陽師十人。殿上人七八人。二時許で結願。

十五日、大原野にて一日大般若經を読む。不空羼索御讀經結願。智詮に終日加持を修させる。今日、中宮の様態は宜しい。ある人、去る十一日夜に不可思議な夢を見る。先日大僧正供養の尊像が光を放ち、中宮の御身を照らす。尊像が中宮を守護しているのを見たという。今日。法印が病者の寝所で護身中に、老姥嫗一人、竊に御寝所を出て逐電したのを見たと言う。実に御験は不可思議である。十六日、大炊亭南庭では陰陽師光晴が如法泰山府君祭を修する。兼実は衣冠を着し祭庭に出て拝礼する。今日、中宮から諸社へ奉幣発遣。中宮は大炊亭に退居中。

\*十月十七日以後の記述無し。

## 〔2〕中宮任子。―御不豫 その三―

十一月九日 八十島祭<sup>③</sup>発遣日也、天皇御乳母大納言三位殿(能保娘、)下向、申<sup>ニ</sup>請院廂御車ニ云々、勅使藏人仲章、奉禮陰陽助濟憲朝臣、自<sup>ニ</sup>中宮、被<sup>レ</sup>副使、蓋先例也、寅刻、驗者智詮法橋参上、追物之儀如<sup>レ</sup>例、天曙之程事了、賜<sup>レ</sup>禄、智詮肩<sup>レ</sup>禄退下藏人頭中宮亮宗頼朝臣仰云、依<sup>ニ</sup>中宮御惱平癒之験徳<sup>一</sup>、

可<sup>レ</sup>上<sup>ニ</sup>賜法眼和尚位、智詮涕泣之外無<sup>レ</sup>他云々、十一月十五日 吉田祭也、余并女房、向<sup>ニ</sup>北隣<sup>一</sup>發<sup>ニ</sup>遣幣帛<sup>一</sup>、行事

親輔、

陪膳以<sup>ニ</sup>左少将定家、依<sup>ニ</sup>参合<sup>一</sup>也、女房陪膳同前、神馬使左近将監時綱也、

十一月十六日 申刻参院、依<sup>レ</sup>召参<sup>ニ</sup>御前、中宮不豫之間事有<sup>ニ</sup>御尋<sup>一</sup>言<sup>ニ</sup>上仔細<sup>一</sup>、其後帰<sup>ニ</sup>参御所方、暫祇候、其後退出、今夜中将家實拝賀、丹二品息、少将教成拝賀、参<sup>ニ</sup>中宮、来<sup>ニ</sup>余方<sup>一</sup>、拜了呼<sup>レ</sup>前、為<sup>ニ</sup>追從<sup>一</sup>也、十一月廿五日 依<sup>ニ</sup>吉日<sup>一</sup>中宮奉<sup>レ</sup>指験、明日可<sup>レ</sup>奉<sup>レ</sup>灸也、

・・・・・・・・・・・・・・・・

閏十二月廿三日 此夜、中宮御惱平復之後、始入内給也、亥刻入御、被<sup>レ</sup>用<sup>ニ</sup>絲毛御車<sup>一</sup>、余乘<sup>ニ</sup>毛車<sup>一</sup>、母儀二品同車参内、出車三両、余并女房、同宿仕也、今両三日可<sup>ニ</sup>祇候<sup>一</sup>、

十一月九日、八十島祭発遣日。天皇御乳母大納言三位殿が下向。車は院に申請し借用する。中宮より勅使と奉幣に使を副える。寅刻。智詮参上。追物儀は例の如く。天曙の頃終了。禄を賜り智詮退下。藏人頭中宮亮宗頼朝臣が云う。中宮御惱平癒の験徳により、法眼和尚位を賜るように奏上する。智詮は涕泣の他無し。十五日、吉田祭。兼実と讃岐は北隣から幣帛発遣。行事親輔。来合わせた定家は陪膳。女房陪膳は同じ。神馬使時綱。

十六日、兼実は申刻に参院。御前へ。中宮不豫についてお尋ね有り。詳細を言上。その後御所方に帰参。退出。大炊亭へ。今夜、家實拝賀。

丹二品息少将教成拝賀。中宮と兼実方へ参る。追従に前へ呼ぶ。廿五日、吉日に依り中宮に験を指し、明日灸治を行う。

閏十二月廿三日、此夜、中宮は御惱平復後、始めての入内。絲毛御車にて亥刻入御。兼実の出車三両。中宮と母儀同車で参内。兼実と北政所は同車で参内。同宿。兩三日は祇候。

〔注〕

(1) 中宮女房。建久元年一月十一日、入内儀とそれ以後に見える女房たち。

- ・女房大貳、(朝親女、光長卿妻弟、件卿為<sub>レ</sub>子令<sub>レ</sub>進也、)
- ・御乳母大納言三位 (後鳥羽天皇御乳母。能保娘、)
- ・中宮女房宰相局 (故信頼卿女、母笋仙安藝也、)
- ・宰相局、(御乳母光長卿妻也、)
- ・女房按察局、(資賢卿女、)
- ・中宮宣旨、(光長卿妻、)
- ・大納言局、(忠親卿女、)
- ・兵衛佐、
- ・兵衛督局、
- ・女房宣旨局

(2) 良經。御書所文人上首。

建久元年一月三日 後鳥羽天皇御元服。

一月六日 左大臣が和歌撰定。詩撰進。

三月廿七日 御書所作文。連句三十余句。兼実以下文士達。

九月十四日 良經。花月各五十首。

九月廿二日 良經。花月百首。

十二月廿六日 二宮。仙洞御所に於いて御書始事あり。

建久二年八月一日 良經は文人に入り、上首となる。

主上。初度の御書所作文事あり。

良經は文人に入り、上首を勤める。

(3) 八十島祭。

大嘗会祭の翌年。吉日に使を摂津国難波に送る。海と島の神々を祭り、国の発展と安泰を祈る。生島神、足島神を主に住吉神、大依羅

神、海神、垂水神、住道神等を祭る儀式。後鳥羽天皇の御乳母大納言三位局が使として、八十島下りをする。

(4) 参考論文。

「二条院讃岐の人生」――前半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(一)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(二)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(三)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(四)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(五)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(六)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(七)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(八)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(九)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(十)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(十一)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(十二)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(十三)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(十四)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(十五)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(十六)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(十七)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(十八)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(十九)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(二十)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(二十一)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(二十二)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(二十三)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(二十四)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(二十五)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(二十六)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(二十七)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(二十八)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(二十九)後半生を中心に――

「二条院讃岐の実人生」(三十)後半生を中心に――

一月十一日 摂政太政大臣長女任子の入内儀が執り行われた。

年表『二条院讃岐の実人生』(六)

(17) 建久元年(一一九〇) 讃岐四十九歳 十七年目。

(兼実四十二歳 中宮十八歳 良經二十二歳)

長女を中宮へと上らせた兼実家の日常生活は一変した。所労ながら中宮を扶持する兼実。傍らで所労の兼実を支え、中宮を扶持し、故良通忌法要と、御懺法法要に参入する讃岐。

御書使中将忠季朝臣御書を持参。女房三位殿から北政所へ。兼実へ。三位殿と母儀三品が同車の青糸毛車は、松明の明りで大炊亭を出発。兼実と北政所は同車。玄輝門、承香殿門を経て藤壺東面北車寄に着く。

御前物陪膳は北政所。役送左大將良經。

女御殿参上。お供は女御殿女房六人。

主上は冠、直衣、御指鞋を着け、夜御殿西戸御帳西に入御。兼実の主上の御装束を撤す。女御殿は御袴御衣を脱ぎ北方に臥御。御供の女房等、終夜上御壺欄に祇候。兼実と左大將は藤壺の饗座へ。

一月十二日

北政所と兼実は就寝。藤壺坤小局を北政所宿所に。祝饗。女御殿の身辺にて雑事を務める。宿候。

一月十三日

祝饗。人々来集。三献あり。女御殿を扶持。宿候。

一月十六日

露頭。女御宣旨。後朝御書。三夜餅。侍始。女官禄等。宿候。

一月十七日

御帳中の本寮御衾を辛櫃に納める。北政所は内裏を退出。

◇二月一日～二月末日まで記述がない。

三月三日

大炊亭にて女房節供を恒の如く。

三月十五日

夜に参内。女御殿の許へ参候。兼実と共に宿候。

三月十六日

痛風の兼実と共に内裏に参候。宿候。

三月十九日 初更に内裏を退出。九条堂へ。堂宿。

三月廿日 故良通月忌法要。兼実と共に参入。初更に大炊亭へ。

四月廿日 立后儀に備えて女御殿は大炊亭へ退出。大炊亭で待つ。

四月廿六日 女御任子立后儀。女御殿入内に付添い参内。宿候。

四月廿七日 兼実と共に中宮の身辺を扶持する。宿候。

四月廿八日 立后第二日目。公卿座では祝饗。初更に内裏を退出。

四月卅日 兼実の氏寺参賀。兼実家の行事。北政所同席参賀。

◇五月一日～五月七日の記述のみ。

五月一日 伊勢大神宮参拝。兼実家の行事。北政所同席。

◇六月一日～六月末日まで記述がない。

◇七月の記述は四日間のみ。

八月六日 良經所労。兼実と共に良經亭に宿泊。介護。

八月十五日～八月廿日 長雨。止雨奉幣。止雨のお祈り。

八月廿三日 灸治で身動き出来ない兼実を介護する。

八月廿四日 昨日に同じ。灸治で動けない兼実の介護。

九月十九日 大炊亭にて兼実と良經の灸治の世話をする。

九月廿日 故良通月忌法要に参入。堂宿。懺法結願は明後日。

九月廿一日 懺法法要に参入。堂宿。明日、御懺法結願。

九月廿二日 九條懺法結願。初更に良經と共に大炊亭へ帰宅。

後夜に良經亭で花月百首あり。兼実に伴われて

参入。簾中で見守り楽しむ兼実と讃岐と慈圓。

九月廿三日 参内。中宮御方へ参候。

九月卅日 今日、内裏を退出。

十月一日 灸治が爛れて歩行不能な兼実の世話をする。

十月十五日 所労の兼実。宇治の御儲を終日沙汰する。兼実に付き添う。

十月十七日 東大寺上棟。太上法皇南都へ御下向。兼実に付き添う。

十月十九日 辰刻、春日社へ参詣。金銀幣を献ずる。午刻。上棟。兼実に付添い興福寺へ。戌刻に宇治へ。

十月廿日 申刻、法皇は宇治へ。昼御膳を供する。還御。此夜、兼実と共に九條へ帰り、直に参内。

十一月八日 兼実息小童。後見に左中辦親經を付ける。北政所が立合う。

十一月十四日 大原野奉幣。兼実と共に北隣から奉幣。発遣。十一月廿二日 吉田奉幣。兼実と共に北隣から奉幣。発遣。

十一月廿八日 早朝兼実と共に九條堂へ。懺法を開始。故女院御忌日結願。初更に参内。退出予定は十二月三日。

十二月三日 内裏を退出。

十二月四日 明日、九條堂懺法結願。夕方に九条堂へ。十二月五日 九條堂懺法結願。故女院御忌日法要に参入。大炊亭へ帰宅。

十二月八日 中宮御方へ参内。明日、御神楽。

十二月九日 内侍所の御神楽。兼実、宮女房等と御神楽を鑑賞。十二月十四日 内裏を退出。

十二月廿日 故良通月忌法要に参入。終了後大炊亭へ帰宅。

(18) 建久二年(一一九二) 讃岐五十歳 十八年目。

(兼実四十三歳 中宮十九歳 良經二十三歳)

兼実は中宮扶持と院内参仕で、起居不能に陥り讃岐に助けを求め、直廬で平臥する。中宮も御不豫。本年は中宮の御不豫を中心に置き、良經の動静は記述のみに止める。

◇中宮任子。―宿十五日「忌付」―

三月廿三日 中宮大炊御門亭へ退出。宿十五日忌付。大炊亭で中宮を待つ。

三月廿九日 灸治の中宮を扶助する。四月五日 頼朝卿女の話兼実から聞けば、やはり不安を覚える。

四月八日 梅宮祭、未刻。九条亭に於いて、兼実と共に神馬十列を發遣。兼実の瘡病が起こり、兼実と同車で晩頭大炊亭に帰る。

四月廿日 賀茂祭。宮女房と家女房等と共に棧敷見物。母儀

四月廿三日 吉田祭也、中宮使を立てる。御禊儀例の如く。申始

五月廿六日 中宮、去三月方忌により御退出。御邪氣を渡し、御

物氣を追ひ、今夕御入内。兼実共々参内。祇候。



◇中宮任子。―御不豫 その一―

八月廿四日 早速、中宮御不例。兼実は内裏での祈禱を手配する。

八月廿五日 中宮の様態は汗が出たので熱が下がる。女房三位殿

お見舞。

八月廿六日 中宮の御不例は続く。種々のお祈りも続く。

八月廿七日 靈所御祓で大略解熱。智詮は全力で護身を修する。

兼実と共に修する九条堂の讀誦之行が満願。

先ず中宮御方へ参内。仕候。兼実は明日参内。

八月廿八日 念仏結願後に兼実が参内。中宮は略平減。兼実と共に

宿候、

八月廿九日 夜。兼実は内裏に帰参する。中宮は大炊亭への退居

を望む。来月にも心穏やかに退居するようにと兼

実は諭す。宿候。

◇中宮任子。―御不豫 その二―

九月廿三日 中宮不例により亥刻に内裏を出て、大炊亭へ御退出。

直ちに智詮が不動法を修し、邪氣を祓う。

九月廿四日 今日御有様、昨日と同じ。お傍に祇候。

九月廿七日 中宮御祈、法印慈圓が修する。子刻始め。中宮は簾

中にあり。母儀二品、兼実と共にお傍に祇候して

扶持に務める。兼実の指検により少々灸治を加え

る。お傍で介護する。

九月廿九日 中宮は法然房に受戒。解熱は灸治の驗だと兼実は云う。

十月四日 加茂御神樂参行。

十月六日 多武峯では三經を供養。中宮は又法然房に受戒。

十月七日 奈良大僧正は不空羂索說經を始め、讀心經廣釈を講

ずる。兼実は白檀一尺六寸不空羂索像一體を供養。

十月九日 兼実は法華經の御讀經を始める。

十月十一日 今日俄思い立ち、兼実は金泥心經一卷を供養する。

十月十二日 神馬一疋を献ずる。臨時春日奉幣使基清。奉幣を發遣。

十月十四日 千度祓。二時許結願。

十月十五日 大原野では一日大般若經を読む。不空羂索御讀經結願。

兼実は云う。去十一日夜、或人が不可説な夢を見た。

大僧正供養の尊像が、中宮の守護を実感する。

今旦、法印が中宮の護身中に、老姥嫗一人竊に御

寢所を出て、逐電したと言う。御驗は實に不可思

議である。

十月十六日 今日、自<sub>レ</sub>宮被<sub>レ</sub>發遣諸社奉幣、在<sub>二</sub>御大炊亭、

\*十月十七日以後の記述無し。

◇中宮任子。―御不豫 その三―

十一月九日 八十島祭<sub>③</sub>發遣の日。天皇御乳母大納言三位殿が下

向になる。寅刻、驗者智詮法橋が参上し、追物

之儀は例の如く。天曙の程に事は修了。禄を賜

い智詮は禄を肩に退下。藏人頭中宮亮宗頼朝臣

が述べる。中宮御悩平癒之驗徳に依り、

賜法眼和尚位を上奏すべき。智詮は涕泣する。

十一月十五日 吉田祭。兼実と共に北隣へ向い、幣帛を発遣する。

陪膳左少将定家。女房陪膳。神馬使は左近将監時綱、

十一月十六日 兼実は申刻に参院、御前へ。中宮不豫の間事を御

尋ねあり。仔細を言上。其後御所方へ帰参、暫祇候、其後退出、今夜中将家實の拝賀、丹二品息、少将教成の拝賀、

中宮へ参り余方へ参る。兼実と北政所に申す。

十一月廿五日 明日、中宮は灸治。兼実は先に指検する。

明日は終日中宮の傍につきそつて介抱する。

閏十二月廿三日 今夜、中宮は御惱平復後始めての入内。亥刻入御。

出車三両、中宮は母儀二品と同車で参内、

兼実と共に同宿して、今日から三日間祇候する。

## おわりに

建久元年一月十一日、兼実家では姫君入内が実現した。兼実と讃岐は中宮御方へ常に参仕して、身辺雑事の扶持に努めている。入内後、三月十五日に中宮は宿十五日「忌付」で大炊亭へ退居になり、その後約二ヵ月間を親元で過ごし、中宮入内は五月廿六日である。

兼実家では次男良經が家系の後継者として地位固めが進行中である。建久元年、後鳥羽天皇の御書所作文が行われた。その後、近習五六人の密かな詩会も、良經宅での花月各五十首、俊成以下文士五六人で花

月百首も行われた。十二月には仙洞御所で二宮の御書始があり、良經が文人に入り上首に選ばれている。建久二年夏。良經の一条亭で作文の行事が行われており、良經に備わる和漢の才能が広く認められた証である。

東大寺の伽藍は、建久元年十月、法皇の南都下向で棟上げが行われた。十一月には鎌倉から頼朝が上洛し、大納言と右大将を拜命して鎌倉へ戻ったが、頼朝は自分の女を良經の嫁に迎え取らせたい意向であった。七月に兼実は能保卿の小直廬一条亭を借り受けて良經を渡し、能保卿の息女を嫁に迎えた。良經の境遇は安定し兼実も心を休める事が出来たのである。

建久二年、兼実は所労悪化で起居不能となり、内裏から讃岐に助けを求めている。種々の治療を加えても体調不良の改善は見られず、脚も利かず手輿を用いた生活状況であった。良經も所労を訴える事があり、讃岐と兼実が良經の居所に泊まり込みで介抱する事もある。ところが兼実は再び歩行困難になり、一ヵ月に及ぶ所労悪化で、讃岐に世話を掛け続けていたが、八月中頃ようやく回復へと向ったのである。

八月下旬に中宮の御不豫が始まった。中宮の傍には母儀、兼実、讃岐、中宮女房などが参候して中宮を扶持する。九月廿三日に中宮の御不豫は更発し、再度大炊亭へ退居になった。兼実家では一大事であり、財力に物を言わせて、讀経や御祈禱、奉幣に供養、護身や物氣追など、手抜きなく執り行う。しかし御不豫の回復は兼実指検による灸治である。父親が手をかけてくれるので中宮は機嫌を直しているように見受けられる。十月中旬以後に、中宮御所は大炊亭から閑院第へと移つ

ており、建久二年閏十二月廿三日に中宮入内となっている。

讃岐は毎月の御懺法法要に参入し、故良通を偲び良通月忌法要にも参入し、更には故女院の御月忌法要にも参入している。兼実も御懺法法要と故良通月忌法要には参入して、讃岐と兼実の歩調は同調している。兼実は讃岐あつての自分であることを悟ったのであろう。入内後二年が過ぎても、兼実が外祖父になる兆しは未だ見えていない。

(いさ みちこ 文学研究科国文学専攻博士後期課程)

(指導…黒田 彰 教授)

二〇一五年九月十日受理